

もとおりのりなが  
本居宣長、大和への旅

本居宣長は、調査・研究などのため、各地を旅しました。明和九年（一七七二）の三月五日から十四日（旧暦）にかけて、宣長ら一行六名が松阪（松坂）から吉野や飛鳥を巡りました。宣長は、「この旅の様子を『菅笠日記（すががさにつき）』という書物にまとめました。この日記は、その後、吉野や飛鳥を巡る人々のガイドブックとしても読まれました。

宣長らの旅の行程は次のとおりです。

三月五日：松阪↓青山、六日：青山↓名張↓室生（大野）↓榛原（萩原）、七日：榛原（萩原）↓西峠↓角柄↓吉野、九日：吉野、宮滝、十日：吉野↓飛鳥、十一日：飛鳥↓檀原（石川・軽）、十二日：檀原↓桜井（三輪）↓榛原（萩原）、十三日：榛原（萩原）↓室生（田口）↓御杖（桃俣・菅野）↓美杉（多気・石名原）、十四日：美杉↓松阪  
この行程から、行きは「伊勢表街道（あお越道）」、帰りは「伊勢本街道」を通ったことがわかります。

六日の様子をもう少し詳しく見てみましょう。一行は、伊賀（名張）と大和（宇陀）の国境にある地藏石仏を見

ながら、三本松宿を通り、当時から有名であった大野寺の磨崖仏（弥勒菩薩像）を参拝します。この日のうちに初瀬まで歩く予定だったのですが、雨が降り、疲れてしまったので、初瀬で泊まるのをあきらめ、榛原（萩原）に泊まることとしました。

宣長は、「萩原」という地名をなぜか懐かしく思い、次のような歌を詠みました。

うつしても ゆかまし物を 咲花の  
をりたがへたる 萩はらの里

（もし、萩の咲く秋だったら、その花の色香を袖に染みこませて行こうものを、咲く花の季節を違えて来たのは残念だ。この萩はらの里）

萩原という地名から、宣長は「ここ萩原を訪れるのが三月ではなく、萩の花が咲く秋だったら良かったのに」な



宣長も訪れた大野寺石仏（磨崖仏）

文・柳澤一宏（文化財課）



認知症の人とともに生きる

「もうこんな時間ですから、そろそろ失礼します。家に帰らないと…」毎日いっしょに住んできた家族が、夜、突然こんなことを言い出したら、あなたはどうしますか。

わが国では10年後、高齢者の5人に1人が認知症になると推計されています。

認知症になると「何もわからない」「何もできなくなる」というわけではありません。

認知症になると、もの忘れによる失敗や、家事や仕事がかまぐいかなくなることが多くなり、認知症の方自身も不安や苦しみ、悲しみを抱えています。そういつたやり場のない気持ちから、怒りやすくなったり、「邪魔者扱い」や「馬鹿にされる」ことに敏感に反応します。

家族や周囲の人は、知らぬ間に本人の心を傷つけてしまうことがあります。「認知症の方は、症状が進行してもプライドを持ち続ける」といったことを理解して接することが大切です。

また、認知症になっても、生活が全くなくなるわけではなく、ご近所の方が、ゴミを出

す日を教えるなど、ちよつとした声かけをすることで、ずいぶん暮らしやすくなります。

一方、介護家族には、「近所に迷惑をかけているのでは」という思いがあります。ご近所から「大変ですね、お互いさまですから、お気づかいなく」といった一言やねぎらいの言葉をかけることで、家族の気持ちは、ぐつと楽になるものです。

家族が認知症になったときは、一人で抱え込まず、周りの力を借りたり、医療や介護の制度を活用しましょう。

認知症になっても、できる限り住み慣れた地域で暮らし続けることができるよう、地域の助け合い、支え合い、絆を深めていくことが大切ではないでしょうか。



認知症に関する相談窓口  
医療介護あんしんセンター  
(☎85・2500)